

保健補導員の高齢者福祉における活動継続に関する研究 —長野県須坂市の事例をもとにして—

叶 寧

Continuation of Japanese Healthcare Workers' Activities in the Welfare of the Elderly: A Case Study of Suzaka City, Nagano Prefecture

YE NING

要旨：

本研究は、長野県須坂市の保健補導員に関する質的・量的調査に基づき、高齢者福祉の関連機関・組織等（民生委員、地域包括支援センター、社会福祉協議会、保健師）との連携・協働に焦点をあてて、保健補導員の高齢者福祉における活動の実態、ならびに活動継続の関連要因と規定要因を明らかにすることが目的である。様々な生活課題、福祉問題が浮上している今日において、地域社会の広範囲の、長期にわたっての支援が必要となっている。住民の福祉事業に対する関心を高め、より多くの福祉の担い手の参入を図ることが必要である。本研究はまず保健・福祉に関する制度政策等において、保健補導員を含む地域住民等に求められている役割と役割を達成するためのサポート、また高齢者に関して規定されている健康・保健・生活支援事業の総合的な連携体制が、保健補導員の活動の方向性を導いていることを明らかにした。また、既存資料の分析により、保健補導員が保健的な役割を果たしつつ、福祉へ協力する意識を有していることを確認した。

さらに、調査により保健補導員は関連機関・組織等とともに、活動を通して築く連携・協働の関係を活用することで、今後さらなる活動の活性化につながると考えられる。そして、任期終了を活動に携わる機会の終了と捉えるのではなく、関心ある活動にそれぞれが携わるきっかけと捉える視点が必要である。任期中の学習と実践が、地域活動の後継者の育成の一助になることに注目し、任期終了後の活動の継続意向について調査した。活動前の積極的な態度、活動を通して実感する活動成果、活動後の関心内容に関する学習・実践の機会の設定が高齢者福祉における活動の継続意向に影響する。それと合わせて、新しい保健補導員になる人のために活動負担の軽減を工夫することとインセンティブの提示等により、今後の持続可能な地域ネットワーク支援人材体制の構築に資する意義がある。

児童養護施設における共感疲労の精緻化に関する研究 ーインタビュー調査を通してー

韓 松 怡

A study on the elaboration of Compassion Fatigue in a residential children's home : An interview-based study

Han Song-Yi

要旨：

本研究の目的は、社会福祉領域における支援者支援という観点に基づき、児童養護施設職員における「共感疲労（Compassion Fatigue）」を「ストレス優位の共感疲労」、「トラウマ優位の共感疲労」、「抑うつ優位の共感疲労」という3つの構造として捉え、その構造を明確にして精緻化をすることであった。

研究方法については、予備調査として児童養護施設を退職した職員を対象にインタビュー調査を行った。予備調査の目的は、児童養護施設で仕事をしながら、普段感じていたつらさやストレス・疲労感などがどのような状況にあったのかを明確にして、共感疲労の構造を明らかにするための適切な質問項目を生成することであった。予備調査結果から、児童養護施設職員における共感疲労の構造を明らかにするための適切な質問項目の生成を試みるとともに、Figley（2002）が作成した共感疲労のプロセスモデルと調査の結果を照らし合わせて、児童養護施設職員における共感疲労の構造の精緻化のための仮説を検討することができた。

本調査では、児童養護施設の職員 22 名を対象にインタビュー調査を行い、質的データ分析法を用いて分析をした。分析の際には、3 つの視点で分析を行った。分析視点1では、共感疲労の関連要因、分析視点 2 では、共感疲労の要因の特徴、分析視点3では、共感疲労のプロセスを作成して、それぞれの視点から共感疲労の構造の精緻化を行った。分析の結果、児童養護施設における共感疲労について3つの共感疲労の構造として、ストレス優位の共感疲労、抑うつ優位の共感疲労、トラウマ優位の共感疲労の構造が、より精緻化した解析結果として明らかになった。このような構造の精緻化によって、共感疲労の3つの構造によって必要な支援が異なり、職員が抱えている共感疲労を明確にしたことで、職員のメンタルヘルスケアだけではなく、子どもの養育の質を高めるための職員への支援について検討することができた。また、児童養護施設への支援として、小規模化に伴う支援や、子どもへの支援の質を保持するための「共感疲労の位置づけ」について考察を行い、子どもへの支援の質を保持するためには共感疲労の3つのタイプそれぞれに対する適切な支援が必要であることが示唆された。

キーワード：児童養護施設、共感疲労、支援者支援

育児と介護のダブルケア期に働く女性への 仮説的支援モデルに関する研究

- ワーク・ファミリー・コンフリクトとストレングスの視点から -

増田裕子

Research on a Hypothetical Support Model for Working Women during The Sandwich Generation of Child Care and Nursing Care

-From the perspective of Work-Family Conflict and Strength-

Yuko Masuda

要旨：

本研究の目的は、子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを探索的に検討することである。仕事・育児・介護の困難な面だけでなく、経験を通して得たもの・良かったことにも焦点を当てた。調査1では、仕事とダブルケアの並立状態をどのように捉え、どのような葛藤を経験し、どのような相互作用が働いてストレングスを獲得してきたかを明らかにするために、ダブルケア期に働いた経験を持つ女性に半構造化面接を実施し、質的分析とTEMを援用したプロセス分析をした。調査2では、先駆的なダブルケア支援を行う自治体での支援体制・内容を明らかにするために、自治体職員を対象に半構造化面接を実施し、質的分析を行った。調査1・調査2より、仕事・育児・介護の状況に応じて何が起こり、どのような問題が生じ、それに対してどのような対処をしたのか、うまく対処できたのか/できなかったのか等のメカニズムが明らかになった。それは、仕事+ダブルケアが始まる前と、仕事+ダブルケア中、生活が落ち着いた後という時期により、状況が異なることも明らかになった。これらの知見を反映し、「予防的な観点からの仮説的支援モデル」、「仕事と育児・介護のダブルケア中の仮説的支援モデル」、「ストレングスを発揮して人と社会に働きかける仮説的支援モデル」の3プロセスに分け、ストレングスを発揮して社会に働きかけるところまでを含めた「育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデル」を提示した。先行研究では、ダブルケアの困難さやポジティブな側面について明らかになっていたが、本研究によりそれらがどのように生じ、どのように対処して乗り越え、その後に当事者にとってその経験がどのような意味をもたらしてストレングスを獲得したのかが明らかになった。

キーワード：育児と介護、ダブルケア、働く母親、ワーク・ファミリー・コンフリクト

Key Words: Child Care and Nursing Care, Sandwich generation, Work-Family conflict, Working mother